ユニセフ 子どもネットニュース

2003秋 NO.6

発行者 ユニセフ子どもネット事務局　財団法人 日本ユニセフ協会　広報室　〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
でんわ：03-5789-2016　ファックス：03-5789-2036　電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

ユニセフトピックス

TOPICS TOPICS

IRAQ

イラク
国連本部爆破テロが発生 ユニセフは活動をつづけると表明

亡くなったクライン・ビークマンさん（右から2番目）とイラクの子どもたち
©UNICEF Iraq

イラクで治安が回復しない中、8月19日、イラクの首都バグダッドにある国連本部の建物で爆破テロ事件が起こりました。建物は大きく崩れ、セルジオ・デメロ国連事務総長特別代表をはじめ、多くの国連職員が亡くなりました。1983年からイラクで活動を続けているユニセフの事務所は別の場所にありましたが、ちょうどその建物にいたユニセフの職員数名が被害にあい、カナダ出身の32歳の職員クリストファー・クライン・ビークマンさんが亡くなりました。

キャロル・ベラミーユニセフ事務局長は、ユニセフの仲間が犠牲になったことに深い悲しみをあらわし「ユニセフの仲間たちはゆるぎない結束の中にある」と述べました。そして、「これから、さらに困難な日々が待ち受けていますが、すべての子どもには未来があり、それは私たち自身の未来でもあります。私たちは、もっとも必要とされているこのときに、人道支援活動を後戻りさせることはないでしょう」と述べました。

新学期がはじまる9月中には、「バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）」キャンペーンが予定されています。状況はますます厳しさを増していますが、ユニセフは活動を続けられるように努力しています。

イラクの子どもたちを取り巻く状況はまだ厳しい
©UNICEF/HQ03-0213/Patrik Andrade

この事件は、多くの人に衝撃を与えました。なぜ国連が攻撃されたのでしょう？ ユニセフ子どもネットのメーリングリストでもさまざまな意見が交換されました。

ユニセフ子どもネットのメーリングリストに寄せられた意見（2003/8/26まで）から一部抜粋

●事件のことはニュースで見てショックを受けています。私は、今回の事件はアメリカに対する見せしめだったような気がします。こんなことを繰り返してもイラクの復興にはつながらないし、妨げにもなることは犯行グループも知っているのではないでしょうか？
（鈴木　千春　17歳）

●イラク戦争を止められなかったのも国連ではないでしょうか？イラク戦争に対して痛みや怒りを持つ人びとは、やりきれない気持ちを国連にぶつけるしかなかったのかもしれません。
（今関　美都　13歳）

●国連が“アメリカ主導の国連”というイメージを払拭できなかったことから起きたのだと思います。あらゆる面で中立の国連というイメージをアピールするとともに、（国連の）構造自体も改革する必要があると思います。
（鈴木　智瑛　15歳）

●すべての争いをなくすためには、国連だけではなくて、この地球の社会全体を変えなくちゃいけないんだけど、そんなの無理なんじゃないって絶望的な気持ちになってきます。でも、イラク人が国連の事件について「イラク人としてしてはならないことをした」と言っているのを見ました。それに、アメリカの同時多発テロで家族を失った人たちの中には、イラク攻撃に反対する団体があるそうです。こういう人もいるんだってことを理解して、協力して平和にするための手助けをしていくべきだと思います。
（大平　乃里恵　18歳）

●イラク国民が、国連＝アメリカって考えているかどうかはわかりませんが、国連は第二次世界大戦後にアメリカを中心に作られたのですから仕方ないところもありますね。安保理も拒否権などの不公平な状況を変えるべきです。本当に国連が改革して、すべての国が尊重しあえる組織にならないと国連が国連である意味がないんじゃないかな。ユニセフは、イラクの子どもを支援するという目的に支障が出ないよう、今回のテロに屈せず、仕事をしてほしいと思います。
（秦　聖一郎　17歳）

●戦後半世紀たった今、こうやって（国連の状況が）おかしいって思う私たちがここにいるのなら、それを変えていくような働きかけをしたいですね。ここでみんなで意見交換していることを明日の世界に生かす方法を考えていくのはどうでしょう？もう、これ以上、平和を願う人がテロなどの被害にあうのは許せないですからね。
（奥村　久実子　15歳）

LIBERIA

リベリア
泥沼の内戦が再発
～国際社会は停戦をつづかせる努力を～

いったんは内戦が落ち着いていたリベリアで、今年の6月以降、政府に反対する勢力が首都モンロビアに攻め込み、ふたたび内戦が激しくなりました。泥沼のような戦闘が繰り返され多くの市民が逃げ場を失って、犠牲になりました。テーラー大統領がナイジェリアに亡命し、8月18日に政府と反政府勢力が和平協定に調印したことで、ようやく落ち着きを取り戻しつつありますが、これからどうなるかは不透明です。

戦争によって、多くの子どもたちに深刻な影響が出ています。政府側、反政府側の両方で子どもたちが兵士にさせられたり、親と引きはなされたり、家族を目の前で殺されたりという例が報告されています。学校は閉められ、保健センターも機能しなくなり、安全な水も手に入らなくなっています。

ユニセフは、内戦が激化していた7月から8月にかけて、リベリア国内のスタッフが中心となって、緊急用の栄養補助食品や高たんぱくビスケットや必要な医薬品を提供したり、避難民キャンプに水を届けたりといった活動が続けられました。和平協定の調印後は、生活の基盤をもとに戻すため、治療に不可欠な医薬品や予防接種ワクチンを現地に届けたり、水の供給を改善したり、避難民キャンプの状況を調査したり、学校の再開の準備をはじめたり、といった本格的な活動を再開しています。

STORY

ユニセフの支援が子どもたちに届くとき…

「将来は歌手になりたいの。神さまの歌を歌うゴスペル歌手になるの」

そう話す14歳のハンフォードは、リベリアの孤児院で暮らす女の子です。両親を失ったのは8歳のときです。お母さんは反政府軍に殺されました。自分も殺されそうになったところを、何とか二人のきょうだいといっしょに逃げ出しました。

この6月からの内戦で、ディクスビルの街にあった孤児院は、戦闘から逃れてモンロビアに移らなければなりませんでした。食べ物や衣服、そのほか必要なものも、何もかも捨ててこなければなりませんでした。

孤児院の子どもたち
©UNICEF Liberia/Mike James/2003

それでも、幸運なことに政府の建物の一角に住む場所を見つけられました。襲撃などからは身を守ることができましたが、食べ物や安全な水などはとても不足していました。

ユニセフは、こうして避難してきた子どもたちの状況を少しでもよくするために、毛布やランプ、せっけん、高たんぱくビスケットなどを、緊急に届けました。

ハンフォードの孤児院にもユニセフから物資が届きました。その中には、指人形や木の電車などのおもちゃ、学校用の教材セットなども入っていて、子どもたちは目を輝かせました。ハンフォードは「歌手になりたい」と夢を語るようになりました。ユニセフの支援は、子どもたちに“ふつうの生活”を思い出させることができたのです。

もくじ

ユニセフトピックス 1
「ユニセフ子どもセミナー2003」報告　子どものための「国内行動計画」には子どもたちの声を 2-3
地図で見る世界の子どもたちのようす～アフリカで今、何がおこっているのだろう？ 4-5
ユニセフ子どもネットメーリングリスト　ユニセフ・エジプト事務所の大澤さんにインタビュー 6-7
REPORT&INFORMATION〈報告とお知らせ〉 8

ユニセフ子どもセミナー2003

子どものための「国内行動計画」には子どもたちの声を！

今年の夏休み、8月6日に「ユニセフ子どもセミナー2003」がひらかれました。
今年のセミナーのテーマは“日本が子どものためにつくる「国内行動計画」に、どうしたら子どもたち自身の声を聞いてもらえるか？”でした。

「国連子ども特別総会」には世界各国の代表者が集まって、子どもたちのために大切な約束をしました
©UNICEF/HQ02-0144/Susan Markisz

子どもに教育の権利を訴えるコートジボワールの子どもたち
©UNICEF/Kent Page

2002年5月にひらかれた「国連子ども特別総会」では、子どもたちのために世界の国ぐにや人びとが、いつまでに何をするのかが、くわしく約束されました。

でも、この総会で何が約束されたのか、日本の子どもたちは知っているのでしょうか？　子どものことなのに、子どもたちが知らないというのもおかしな話です。約束の中には、各国が社会のさまざまな人（この中には子どももふくまれます！）と協力して、約束を実現するための「国内行動計画」を今年の末までにつくる、というものもありました。それなら、日本の子どもたちだって、日本でこの計画がつくられるときには、意見を聞いてもらえるはず…。でも、今のままでは、むずかしいかもしれません。

今回のセミナーには、84人のさまざまな年齢の子どもたちが集まり、自分たちの経験を話し合ったり、意見を交換したりしました。これから、「国内行動計画」をつくったりするときに、だれに、どんなことを考えてほしいか、たくさんの意見が出て、それを国会議員や外務省の担当の人に伝えることができました。

NETWORKER

参加したユニセフ子どもネットワーカーが、セミナーのようすを報告してくれました。

午前 a.m.

ICE BREAKING お互いを知ろう

©日本ユニセフ協会/NOZAWA

まず、話し合うグループごとに自己紹介。どうして今日参加したのか、ふだんは何が好きで、どんなものを大切にしているか、などを伝え合いました。はじめて会う人同士なので最初は緊張していましたが、お互いを知るうちに、会話がはずんでにぎやかになり、友だち同士のようななごやかな雰囲気になってきました。

VIDEO ビデオ「子ども参加」

『2003世界子供白書』のビデオをみんなで見ました。「子ども参加」がテーマのこのビデオの中では、赤ちゃんでも自分の方法で意志を伝えていること、おとなはそれを聞いたり理解したりできるようになる必要があること、スポーツなどを通じても子どもや若者たちは参加したり、いろいろ学んだりできること、学校では知識を覚えるだけでなく、参加型の学習を通じて学ぶことができること、など世界のさまざまな例が紹介されました。

LECTURE 「国連子ども特別総会」と「子ども参加」

ゲストの「子どもの権利」専門家 平野裕二さん(セミナーでは“平野はかせ”と呼ばれていました)が「国連子ども特別総会」について、総会に若者代表として参加した山本佳世さんが、若者が国際会議に参加したときのようすを説明してくれました。

平野はかせ　山本佳世さん

国連子ども特別総会までの流れ

■1989年11月　「子どもの権利条約」ができる
■1990年9月　「子どものための世界サミット」がひらかれる
➡「子どもの生存、保護および発達に関する世界宣言」＋「行動計画」
1990年代のうちに世界の子どもたちの生活をよりよいものにしようという、各国の代表による約束

約束は守られたかな？

150カ国以上が国内行動計画をつくったけれど…
＊作りっぱなしで、そのあとのフォローがちゃんとおこなわれなかった
＊国内で力を持っている人（首相・大統領、政治家など）や、お金や力を持っている先進工業国が子どもの問題をあとまわしにしてしまうことが多かった
＊「子どもの権利条約」やそのほかの子どもに関わる政策と関係ないところで行動計画がつくられた
＊子どもや若者がほとんど参加しなかった

そうして…

2002年5月
「国連子ども特別総会」が開かれる
▶総会前に「子どもフォーラム」が開かれ、国連総会ではじめて子どもが演説した
▶成果文書「子どもにふさわしい世界」が採択される
（2010年～2015年までに今度こそ世界の子どもたちの生活を向上させようという、各国の代表による約束）

「子どもにふさわしい世界」の特徴は？

＊変わらなければならないのは「子ども」ではなく「世界」であることをはっきりさせた
＊前よりも多くの問題を取り上げるようになった

4つの優先分野
① 健康的な生活をすすめること
② 質の高い教育を提供すること
③ 虐待、搾取および暴力から保護すること
④ HIV／エイズとの闘い

＊小さい子どもだけではなく、思春期の子どもにもっと目をむけるようになった
＊すべてのおとな・子ども・若者が協力して「子どもにふさわしい世界」をつくっていかなければならないことが強調された
＊とくに子ども・若者の参加が大切だと、あちこちで強調された

「子どもにふさわしい世界」を作るために、これから何をする？

＊（できれば）2003年の終わりまでにそれぞれの国で「国内行動計画」をつくる
＊それぞれの国で約束がどのぐらい守られているか、ユニセフと国連事務総長が定期的にチェックする。国連事務総長は、5年ごと（2006年・2011年・2016年）に報告書を出す予定

GROUP ACTIVITY グループで意見交換「最近自分の身の回りで気になっていること」

いろいろなことを勉強した後、最近、気になっていることや問題だなと思うことを話し合うグループワークをしました。年齢別に分かれた16のグループが、それぞれたくさんの意見を出し合いました。

各グループで出た意見の中には、いじめがある、校則が厳しい、おとなに意見を聞いてもらえない、遊び場が少ない、森や自然がなくなって駐車場や住宅になってしまった、といったようなものがありました。また、子どもの犯罪についての意見が多く出て、子どもが起こす犯罪や、それについて報道されることに、関心があることがわかりました。世界で起こっている戦争のことをあげたグループも多く、身近な問題から世界の問題まで、子どもたちは、いろいろなことが気になっていて、それをしっかり問題提起することができるんだということを、参加者自身やまわりのおとなも感じたようです。

©日本ユニセフ協会/NOZAWA

レポート

私は、中学3年生を中心とした“メロングループ”に入りました。

たくさんの意見が出てきましたが、1番多かったのはおとな達への批判でした。おとなが子どもの意見を真剣に聞いてくれない、という意見は、家庭内のことだけでなく、普段通っている学校など、広い範囲での問題になっているように思います。おとなの意見も、子どもの意見もすべて正しいわけではないのです。だから、たまには真剣に子ども、生徒の話をじっくり聞いてほしいと思いました。

今回のセミナーでは答えも正解もありませんでした。ただ、自分の思っていること、感じていることを素直に表現することが大切なのです。それができる私たちは自分を、幸せと感じるべきだと思います。世界では、まだまだ自分の思っていることすら、声に出せない子ども達がたくさんいるのです。

（山瀬　麻里絵）

レポート

●●●レクチャーを聞いて●●●

“子ども達にとってふさわしい世界＝全人類にとってふさわしい世界”

この言葉は、今でも深く私の心の中に残っています。「子どもにふさわしい世界」の実現のために、変わらなければならないのは世界。しかし、おとなたちは子ども達を変えようとしていました。

子どもの問題は、子どもが1番よく知っている。「子どものために、かつ、子どもとともに世界を変えていく」という決意があらわれるようになりました。最近では、子どもが会議の中のあらゆる分野で活発に発言したり、本気でおとなたちが子どもの意見を聞く場所が国際的にできているようです。

しかし、世界には自分が権利や価値のある人間だとは知らない子どもがたくさんいます。だから何より大切なことは、子どもが参加すること。そして、知ることなのです。

（山瀬　麻里絵）

pm 午後

LECTURE

「国内行動計画ってなあに？」

またまた登場の平野はかせが、「国内行動計画」について説明してくれました。

何のために、何をもとにして作るの？	「国連子ども特別総会」で約束したことを実行するために、「子どもにふさわしい世界」にもとづいて作ります。 2010年までに政府が何をするかというのが、主な内容です。もちろん「子どもの権利条約」も参考にし、今、日本・世界の子どもたちが何を求めているのかを第一に考えて作らなければなりません
日本では、だれがどんなふうに作るの？	まだ決まっていません。 ＊たぶん外務省が、ほかの省庁や民間団体の意見をききながら作ることになるのではないでしょうか？ ＊もっと別のやり方も考えられます。 たとえば…別の役所が中心になって作る／子どもの問題をまとめてとりあつかう役所などを新しく作って、そこが作る ／国会で話し合って作る…など
国内行動計画づくりに、子どもはどう参加できるの？	子どもたち自身、民間団体、国会議員などが、「こんなやり方で子どもが参加できるようにしてほしい」と求めていかなければなりません。そうしないとむずかしいかも。 ＊ほかの国の例：子どものための計画づくりで、アイルランドはおよそ2,500人の子どもたちの声をききました。ニュージーランドも7,500人以上の子どもたちから意見をきいています。
国内行動計画ができると、どうなるの？	作っただけでは、あまり意味がありません。どうすれば行動計画をきちんとおこなっていけるか、みんなで考えていく必要があります。 たとえば…「だれが、いつまでに、何をやる」ということをはっきりさせる ／お金や人をきちんと用意する ／毎年、または何年かおきに、計画がどのぐらいおこなわれているかをチェックする

GROUP ACTIVITY

「国内行動計画」に子どもたちの意見を！

だれに、何をしてほしい？そのために自分たちは何ができるだろう？

©日本ユニセフ協会/NOZAWA

これまでに出てきた意見や、説明で知ったことをもとに、日本で「国内行動計画」を作るときには、どうしたらいいだろうか？特に子どもたちの意見を聞いてもらえるようになるために、だれに何をしてほしいか、そして、そのために子どもたちには何ができるかを、項目ごとに考えるクループワークをやってみました。

ワークショップで出された各グループの主な意見をまとめました！　（中津川　有紀）

解決したい問題や考えたいテーマ	何が必要？	だれに？	何をしてほしい？	子どもは何ができる？	どうやって？
いじめ	言葉	政治家	相談にのる	子どもの意見を伝える	子ども参加の会議
子どもの犯罪	勇気	政府	見本になる行動	国会などで演説	署名運動
公園がない	協力	家族	呼びかけ	声をかける	アンケート
子どもの意見をおとなに聞いてもらうには	調査	親	話し合いの場を作る	知る	政府に手紙
世界問題について考えよう	集まり	周りの人全員	子どもをひとりの人間として見る	把握する	インターネットやホームページ
マナーと家族	人と人とのふれあい	身近な人	子どもに選挙権を与える	考える	テレビCMで宣伝
学校でもっとユニセフ	体験	地域	資金援助	人の意見を聞く	チラシ
	時間(ゆとり)	教育委員会	キャンペーン企画	わかりあう	ポスター
	費用	学校	地域の活動を増やす		特別授業
		先生	カリキュラム見直し		
		警察	コストのむだづかいをやめて		
		役所	いいところも見て！		
		メディア			
		友達			

たとえば…（こんな意見も…）

子どもの犯罪をなくすために➡役所・学校の先生・警察に➡見本になるような行動をとってほしい
（マンゴーグループ）

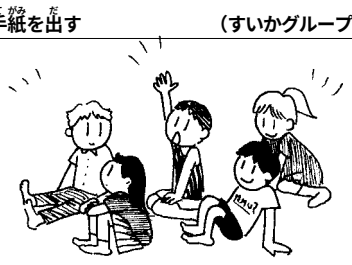
子どもの意見を尊重するために➡おとな・親・学校の先生・市長・知事・内閣・国会議員・政治家に➡子どもじゃなくひとりの人間としてみてもらいたい、すべての人に子どもの権利を知ってもらいたい、いろんな立場の人と子どもが話し合ってほしい
（ももグループ）

いじめをなくすために➡市長・区長・両親に話し合ってほしい、相談所をたててほしい、前のいじめで解決したものから学んでほしい➡（自分たちは）チラシをつくったりくばったりして働いてくれる人を集める
（レモングループ）

地元の子どもの意見を聞く調査をするために➡市の議員に対して➡子どもたちが自分の意見を言う場をつくり意見を提出する
（柿グループ）

何をするにも費用が必要➡国に➡予算を増やしてほしい、学校に➡無駄なコストの見直しをしてほしい➡（自分達は）学校の予算案をつくる、政府に手紙を出す
（すいかグループ）

©日本ユニセフ協会/NOZAWA



LECTURE

ほかの国では子どもたちがどんなことをしているの？

全体の進行役をしてくださった本田涼子さん
©日本ユニセフ協会/NOZAWA

【ガーナの例】

セミナー全体を進めてくださった本田涼子さんは、元ユニセフ・ガーナ事務所のスタッフです。ガーナでは、子どもたちがどんなことをしているか、ビデオを見せながら説明してくれました。また、日本でも、川崎市など、子どもの権利に関する条例づくりに子どもたちが参加している例があることが報告されました。

報告

ガーナでは、政府とユニセフが5年ごとに子どものための行動計画を作成し、そのときに子どもたちが入って3日間にわたる話し合いをしました。参加した子どもたちは、北部・南部の12歳未満の子ども、ストリートチルドレン、農村の子ども、学校に行けない子どもなど出身はさまざまでした。最初は子どもたちにも“権利”があるということを知らなかったので、まず“子どもの権利”を知る勉強をはじめました。学習会では、自分たちが毎日直面している問題をみんなで話し合いました。学習会の最後には、現実の問題を描いた劇を作りました。熱心に取り組む子どもたちに、専門家などのおとなたちが協力をしてくれたそうです。そして行動計画に対する提案をしました。子どもたちの出した提案は「貧困のために買春の犠牲になる子どもがいます。先生は学校で何も教えてくれません。子どもを産んだら学校に戻れないなんて法律はないのに、実際は戻りたくても戻れません。家に子どもが多すぎて、満足に育ててもらえません（家族計画の問題）。医者や看護師の対応がとても悪いです。……だからおとなを教育してください！」というものでした。そしてまとめとして予算の使い道、HIV/エイズ対策、学校や教育などについての声明をだしました。それらはきちんと「国内行動計画」に反映されたそうです。
（中津川　有紀）

PRESENTATION 発表！

©日本ユニセフ協会/NOZAWA

最後に、こうして、話し合った内容を、ホールで参加者全員が集まって発表しました。会場には、「国連子ども特別総会」にも出席した参議院議員の南野知恵子さんや、外務省の方が参加し、子どもたちの意見に耳をかたむけました。

南野議員は、「みなさんがこうしていろいろなことを考えるのはとてもいいことだと思います。私は、何よりもみなさんに命を大切にしてほしいと考えています」とコメントしました。外務省の久野和博さんは「みなさんが、さまざまな問題を私たちおとなと同じようなアプローチで考えているようすを見て、みなさんも私たちおとなと同じ“ことば”をもっていると感じました。こういう機会がこれからもあれば、みなさんの声をぜひ聞かせていただきたいと思います」と話されました。

参加してくださった南野知恵子議員（左）と外務省の久野和博さん
©日本ユニセフ協会/NOZAWA

感想

皆で出し合った意見をまとめて、発表して…。短い時間の中で大変だったと思うけれど、皆輝いていた。この貴重な意見をどうか見捨てないでほしい。これからの日本や世界に役立ててほしいと思う。

このワークショップを通じて、いろいろな人の考えがわかった。自分と同じようなことを考えていたり、その反対に違うことを考えていたり。それぞれが自分の考えを一生懸命言葉にして、出し合って、ひとつの模造紙にまとめていく活動はとても素敵なことだなぁと思った。

世界にはいろいろな人がいて当たり前。そうでなければおもしろくない。けれどそこからうまれる思い違いや衝突もある。それをどう解決していくかということも少し皆で話し合えた気がする。
（中津川　有紀　16歳）

私は、このセミナーに参加することができて本当に良かったと思っています。公の場で自分の意見を言うことができ、大勢の人の意見を聞くことで、たくさんの収穫もありました。

たとえば、知ることの大切さ。自分には、生きる権利があること、そして私たちひとりひとりが価値のある人間であること。

このことを知らない子ども達は、開発途上国に限らず、最近は日本にも増えてきていると思います。

これは、日本の大きな社会問題だと思います。もっと、たくさんの人に知ってほしい。と、このセミナーに参加して常日頃感じるようになりました。貴重な体験をありがとうございました。
（山瀬　麻里絵　16歳）

もっとみなさんの意見を！

このセミナーで各グループから出た意見は、報告書にまとめられて、国会議員などに届けられる予定です。

みなさんも、国内行動計画に子どもの意見を入れてもらうために、どうしたらいいと思いますか？どんなアイデアでも、みなさんの考えをユニセフ子どもネット事務局までどしどし寄せてください。

地図で見る世界の子どもたちのようす

UNICEF WCAR/Kent Page

アフリカで今、何がおこっているのだろう？

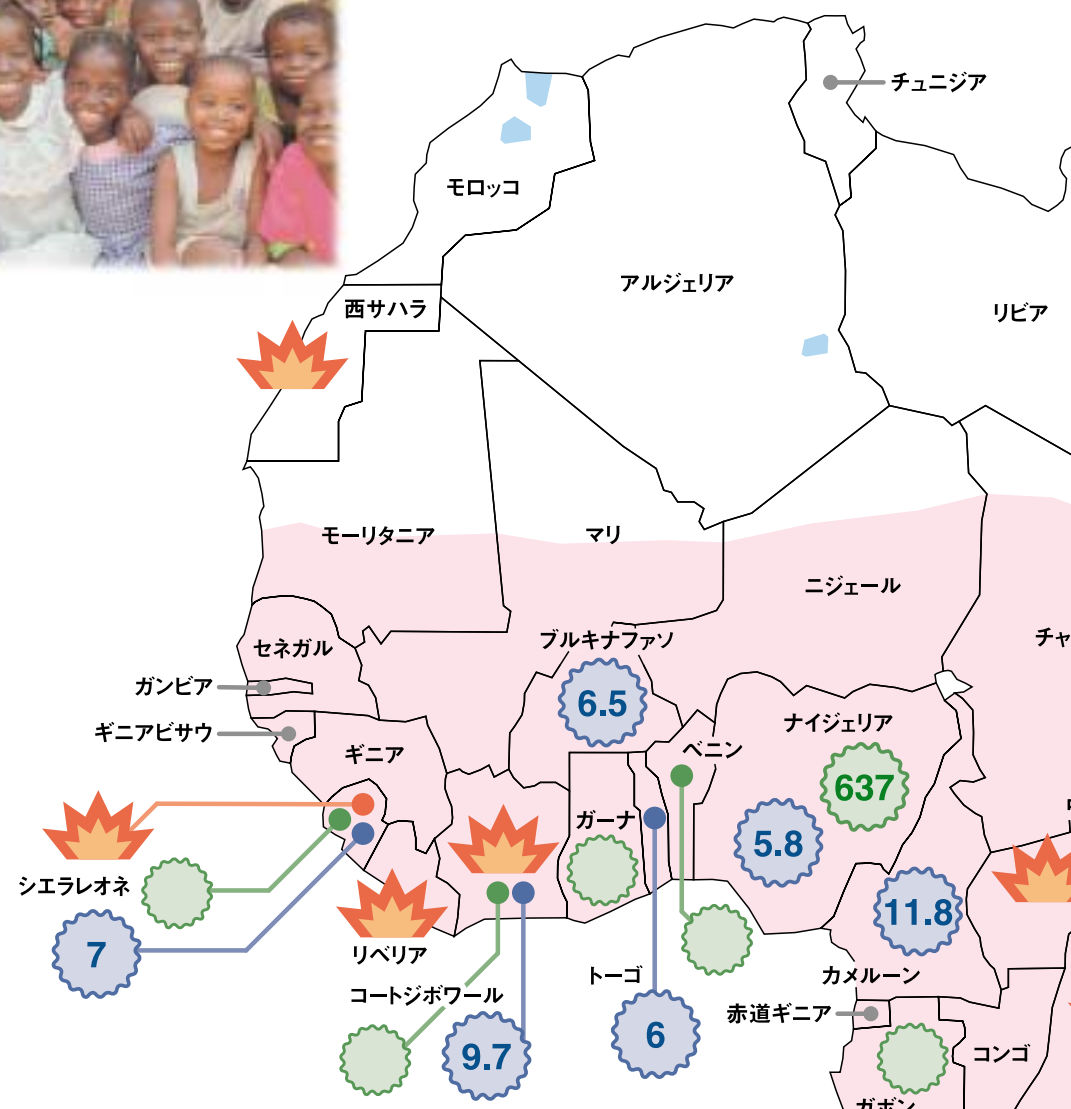
「アフリカ」と聞いて、みなさんは何をイメージしますか？

8億人近くが暮らし、53カ国もの国があるアフリカ大陸は、全世界の22パーセントの面積を占めています。多様で豊かな土地がらですが、植民地支配や奴隷貿易など悲しい歴史も経験してきました。今のアフリカには、貧しい、戦争をやっているなどのマイナスのイメージもあるかもしれません。経済の大きさをあらわすGDP（国内総生産）という指標を見ると、アフリカが世界に占める割合は1.7パーセントにしかなりません。現在、特に開発が遅れている“後発開発途上国”と呼ばれている国は世界に49カ国ありますが、そのうち34カ国はアフリカの国です。

今年9月末に、東京で「第3回アフリカ開発会議」という大きな国際会議がひらかれます。アフリカ各国の首脳や、アフリカの支援にたずさわっているさまざまな国や機関、NGOなどの代表が集まって、これからどのようにアフリカの開発に取り組んでいったらよいかを話し合うのです。

たしかにアフリカをとりまく状況は深刻です。しかし、一方でこれらの問題に対する子どもや若者たちによる取り組みが進んでいるのもアフリカです。今、アフリカでは何がおきているのでしょう。日本や国際社会にできることもたくさんあります。どんな取り組みがもとめられるのか、考えてみましょう。

UNICEF WCAR/Kent Page



アフリカから「ポリオ」と「マラリア」を追い出そう！

ポリオやマラリアって聞いたことがありますか？そう、病気の名前です。ポリオは、口から入ったポリオウイルスによっておこります。感染しても症状が出ない人が多いのですが、いったん病気になると手や足の麻痺があらわれます。

マラリアは、蚊が運ぶマラリア原虫によって起こります。激しく発熱し、ひどくなると昏睡状態になって、命を失います。

どちらの病気も、アフリカ、特にサハラより南の地域で危険が高くなっています。マラリアは、アフリカの子どもが命を失う最大の原因で、アフリカでは、30秒にひとりの子どもがマラリアで命を失っているといわれています。

ポリオは、世界で根絶が間近となっていますが、まだ危険が高いとされている国の半分以上はアフリカの国です。

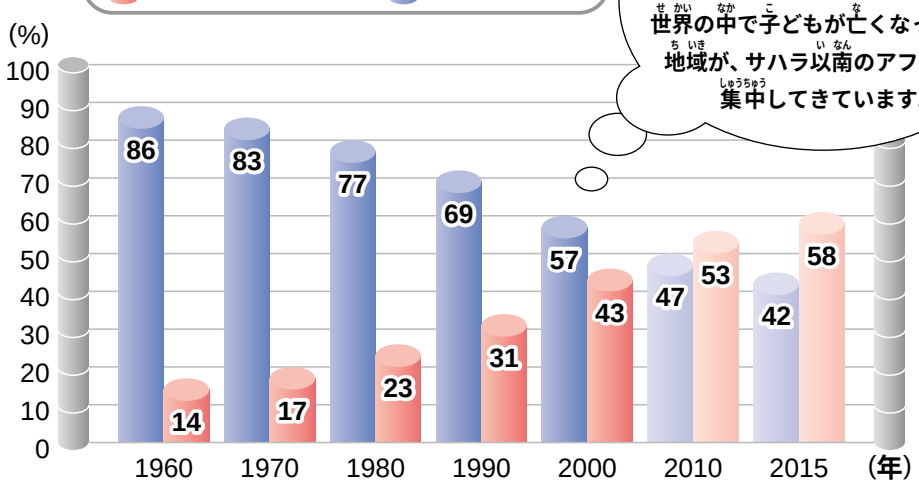
ポリオは、予防接種で防ぐことができます。生まれてから早いうちに、すべての子どもが予防接種を受けることで、ポリオをなくすことができます。

マラリアにはまだワクチンがありません。病気にかからないよう、蚊に刺されないことが大切です。マラリア原虫を運ぶ蚊は夜行性なので、夜は蚊帳の中で眠ることで大きな予防効果があります。

モザンビークでのポリオ予防接種キャンペーン
UNICEF/Giacomo Pirozzi

5歳未満で亡くなる子どもたち

世界の中でサハラ以南のアフリカが占める割合の変化と予想



2000年には、世界で5歳になる前に亡くなる子どもの43%がアフリカの子どもでした。世界の中で子どもが亡くなっている地域が、サハラ以南のアフリカに集中してきています。

出典：“The Young Face of NEPAD” UNICEF

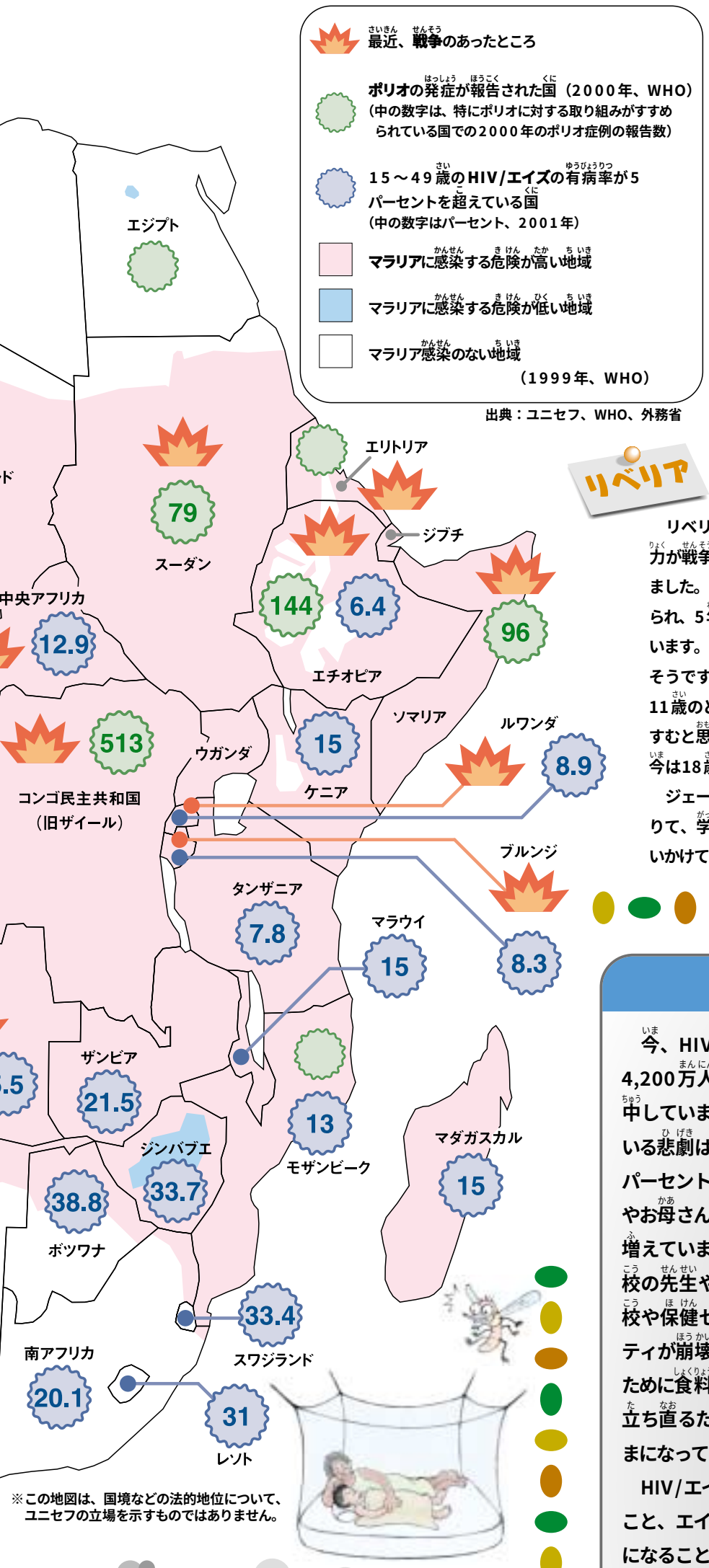
スカウトたちがポリオ予防に活躍！ アンゴラ

「こんにちは、イザベルといいます。今度、ポリオの予防接種があるんですけれど、知っていますか？」町で赤ちゃんを連れたお母さんにイザベルは勇気を出して話しかけました。お母さんは、イザベルをいぶかしげに見ます。「ポリオという病気になると、足や手が使えなくなってしまいます。でも、予防接種で二滴の薬をこの子の口にたらしてもらうだけで、一生ポリオにならなくてすむんです」とイザベルは説明をつづけます。

アンゴラでは、7,000人のガールスカウトやボーイスカウトのメンバーたちが、“全国ポリオ予防接種デー”にあわせて、人びとにポリオや予防接種の宣伝をする活動をしました。

「ただなんてあやしいわ」とうたがうお母さんに、「本当です。ユニセフがワクチンを提供してるんです」とイザベルは説得します。ようやくお母さんは、「わかったわ。明日は子どもに予防接種を受けさせるようにするわ」と答えてくれました。

このときの予防接種デーでは、300万人以上の子どもたちがポリオの予防接種を受けることができました。アフリカ各国では、大規模な予防接種キャンペーンが次つぎに成功していますが、アンゴラでは、ポリオ撲滅作戦にこうして子どもたちが一役かっています。



出典：ユニセフ、WHO、外務省

※この地図は、国境などの法的地位について、ユニセフの立場を示すものではありません。

平和と安定がなにより必要…

アフリカでは、いくつもの戦争がおこっています。原因は、民族や宗教の対立、貧困や経済の問題、政治の問題などさまざまです。混乱の中で、子どもたちは、予防接種も受けられず、学校にも通えず、肉親を失い、自分自身も兵士として戦争にまきこまれることさえあります。難民や避難民となって、大変な生活を送らなければならない人も何百万人もいます。

アフリカの問題を解決しようとするとき、まず、平和がなければなりません。平和がなければ、何をしてもすべてが水の泡になってしまうからです。どのようにしたら平和が定着するのか、戦争になる理由は何か、世界の人びとが一緒に考える必要があります。

今年、コンゴ民主共和国で起こった武力紛争で避難民キャンプに逃れてきた人びと
EUphoto via UN #UNE 2769

リベリア　元子どもの兵士が子どもたちを手助け

リベリアでは、1989年から政府軍と政府に反対する勢力が戦争を続けてきました。どちらにも子どもの兵士がいました。ジェームズは、6歳のころ、反政府軍の兵士にさせられ、5年間、前線で戦いました。たくさん人も殺したといいます。いつも麻薬を与えられていて、痛みも感じなかったそうです。ジェームズがようやく兵士から解放されたのは11歳のときでした。「もう戦わなくてもいい、殺さなくてもすむと思うと、とてもほっとした」そう話すジェームズは、今は18歳のたくましい青年です。

ジェームズは、ユニセフも支援しているNGOの助けを借りて、学校に通い、いつかは医者になりたいという夢を追いかけています。そして、今では、ほかの子どもたちに、たいこや歌、踊りを教えています。戦争をしているときには、“戦争のボス”というあだ名までつけられたジェームズは、「何より子どもたちが幸せそうに新しいことを学んでいる姿を見るのが好きです」と話す心優しい青年になり、リベリアの子どもたちの平和のためにがんばろうとしています。

南部スーダンで解放された子どもの兵士たち
UNICEF/HQ01-0088/Stevie Mann

HIV/エイズの悲劇

今、HIV/エイズにかかっている人は世界におよそ4,200万人います。そして、その7割がアフリカに集中しています。病気の広まりがアフリカにもたらしている悲劇は数え切れません。HIV/エイズの有病率が5パーセントを超えているような国ぐにでは、お父さんやお母さんが次つぎに亡くなり、エイズ孤児が急激に増えています。働きざかりの人がいなくなるため、学校の先生や、保健員などが極端に足りなくなり、学校や保健センターが機能しなくなったり、コミュニティが崩壊してしまったところもあります。干ばつのために食料不足が起こっている国でも、その被害から立ち直るために働ける人がいなくなり、畑は荒れたままになっています。

HIV/エイズの検査がもっと簡単にできるようになること、エイズの発病をおさえる薬が安く手に入るようになること、お母さんから赤ちゃんへの感染を防ぐこと、孤児になった子どもたちを保護すること、そして何より、新しく感染する人をなくすために、子どもや若者がこの問題をよく知ること。すべての対策がすぐにおこなわれなければなりません

この家族は19歳のお姉さんが世帯主。そのもとで5人の子どもたちが暮らしている。両親はエイズで亡くなった
UNICEF/HQ02-0314/Giacomo Pirozzi

UNICEF WCAR/Kent Page

子どもや若者がHIV／エイズ予防に立ち上がっているよ！

シエラレオネ

首都フリータウンにあるユニセフが支援する青少年情報センターは、若者たちが気軽に立ち寄って、ゲームを楽しんだりできる場所です。ここで、若者たち自身がボランティアのカウンセラーとして、HIV/エイズを予防するための知識を伝えたり、話し合いをしています。センターには、人目につかずに入れるHIV/エイズの検査が受けられる場所があり、若者がいろいろな相談をできるようにもなっています。

ブルキナファソ

ブルキナファソには子ども国会があり、100人の子ども議員がいます。教育を進めようという計画をはじめる記念式の場に出席した子ども議員たちは、政府の役人や国連やさまざまな機関の代表者を前に、「HIV/エイズの危険性についてきちんと情報提供してほしい、きちんとおとなが子どもに教えなければ、私たちは命と引きかえにそれを学ぶことになってしまう」と訴えました。

ガンビア

ガンビアでは、多くの学校で「チルドレン・アゲインスト・エイズ（エイズと闘う子どもたち）」という名前のクラブがつくられはじめています。中学生が中心ですが、エイズにかかった人の話を聞いたり、さまざまなイベントをひらいたりしています。また、小学生や小さな子どもたちにも、ぬりえを使ったりして、わかりやすくHIV/エイズを伝える活動をしています。

日本の技術がマラリア予防に大きな進歩をもたらしています

マラリアを防ぐためには蚊帳が効果的です。殺虫剤につけて処理した蚊帳を使うことをユニセフもすすめていますが、定期的に殺虫剤で処理しないと効果がなくなってしまいます。そこで、日本の企業が、あらかじめ殺虫剤が繊維に含まれていて、定期的に殺虫剤につけなくても効果がつづく画期的な蚊帳を開発しました。マラリア撲滅のための要請を受けて、この蚊帳をつくる技術がタンザニアのメーカーに移され、アフリカの人が自分達でこの蚊帳を現地生産できるようになりました。まだ、アフリカで必要とされている量の10パーセントしか生産できないため、これから、この蚊帳をできるだけ安く、たくさん供給できるようにすることが課題です。

ユニセフ子どもネット メーリングリスト

ユニセフ・エジプト事務所の

大澤さんにインタビュー

UNICEF Egypt/Osawa

こんにちは！子どもネットワーカーの秦です。みんなは、ユニセフのスタッフが海外でどんなお仕事をしているのか、興味あるよね？ユニセフ子どもネットのメーリングリストを通じて、日本から遠く離れたエジプトでユニセフのお仕事をしている大澤祐子さんが、ネットワーカーとのインタビューに答えてくれました。これは、夏休みの7月28日から8月5日におこなわれ、わずか9日間でしたが、たくさん質問をすることができたので、みなさんにインタビューのようすを報告します！

大澤さんからのメッセージ

みなさん、はじめまして！ユニセフ・エジプト事務所の大澤祐子です。このインタビューを通じてエジプトでおこなわれているユニセフの仕事はもちろん、みなさんになじみの薄いエジプトという国をよりよく知ってもらえたらなあって思っています。

昨年11月よりユニセフ・エジプト事務所の子ども保護担当として、主に子ども、女性や女の子への暴力防止に取り組んでいます。女性や女の子への人権を無視した行為である女性性器切除を廃絶するプロジェクトの立ち上げから、現在進行中のプロジェクト管理までをおこなっています。ほかに、子どもの保護に関する問題として、子どもの労働、ストリートチルドレンや障害のある子どもの問題に取り組んでいます。

赴任して9カ月と日が浅いのですが、以前から中東地域に関心があったので、みずからこの任地を希望しました。日本のメディアでは、「中東＝テロリスト」と描写されるのが多いことにふと疑問を感じ、自分の目と耳で確かめたいと思うことからはじまりました。大学院在学中、イスラエルにあるパレスチナのNGOで短期間働いた経験がありますが、実際に腰をすえて現地にいるのははじめてで、毎日が新しい発見でいっぱいです。みなさん、どうぞよろしくお願いします！

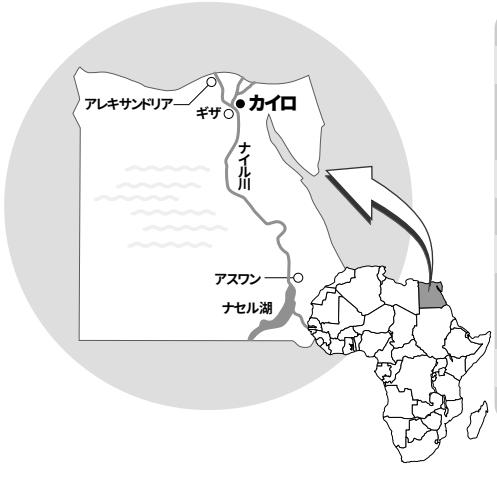
大澤さんが女性性器切除廃絶に向けたプロジェクトの視察に訪れたときに、プロジェクトのために働いているスタッフと撮った写真です
UNICEF Egypt/Osawa

PROFILE

1995年に慶応義塾大学法学部政治学科を卒業後、総合商社の広報室に3年勤務。その後、開発関係の職業につきたいという思いから、アメリカのニューヨークに渡り、コロンビア大学国際関係公共政策大学院で開発学を学ぶ。コロンビア大学在学中の2000年1月から2002年8月まで、国連本部のあるニューヨークの国連ボランティア計画北米駐在事務所にて「2001年ボランティア国際年」の広報渉外活動を担当。2002年11月から、ユニセフ・エジプト事務所の子ども保護担当として活躍中。

明るいエジプトの子どもたち
UNICEF Egypt/Osawa

エジプト主要データ



国名	エジプト・アラブ共和国
首都	カイロ
面積	100万1,449平方キロメートル（日本の約2.65倍）
人口	6,908万人
主な宗教	イスラム教
言語	アラビア語
5歳未満児の死亡率	出生1,000人あたり41人（世界で83位）
成人の識字率	男性67パーセント／女性44パーセント
初等教育純就学率	男性88パーセント／女性84パーセント

※ おもなデータは「世界子供白書2003」による

Q エジプトと聞くと、ピラミッドや砂漠というイメージです。実際のエジプトとはどんな国で、人びとの暮らしや子どもの現状はどうなっていますか？また水不足はないのですか？文化や習慣、宗教についても教えてください。
（秦　聖一郎　17歳）

A エジプトは、中東でサウジアラビアについで2番目の経済大国です。また中東文化の中心でもあります。宗教は、国民の約94パーセントがイスラム教徒、残り6パーセントがキリスト教徒です。エジプト人は基本的にとても社交的で明るい人びとだと思います。日本人と大きく違う点といえば、よく言って大ざっぱなところです。その代表例が時間にルーズなことですね。

水の問題ですが、エジプトはナイル川の水に頼っているため、人口の97パーセントがナイル川の流域に暮らしています。いまのところ水不足に関してあまり耳にすることがありません。ただ安全な水の確保（家庭への水道設備が整っていないこと）は問題になっていて、ユニセフは家庭への水道とトイレの導入に力を入れています。さらに、公衆衛生に関する広報活動にも力をいれています。

Q 今現在の“エジプトの治安”はどういう感じなんですか？
（中佐　友衣　16歳）

A 私が住んでいるカイロはとても治安が良いところです。以前はニューヨークに住んでいたのですが、カイロのほうが、治安がいいと思います。夜遅くひとりで歩いても危ない目にあったことがありません。ただ、上エジプト（ナイル川上流地域）は危険地域とされていて、行く前に政府へ報告しないといけないのです。

Q 子どもたちはどんな暮らしをしているんでしょうか？エジプトの子どもたちが通う学校は、どんなようすですか？
（三木　綾子　13歳）

A エジプトの学校制度の問題点は、学校環境と教育の質の悪さです。「知識詰め込み型」の教育で、先生の質の悪さが大きな問題になっています。多くの子どもたちが家庭教師に頼らざるをえない状況です。そして、家庭教師代を払うことのできない、貧しい家庭の子どもたちは学校を途中でやめてしまうことが多いのです。また、学校では1クラスの人数が44人と多いのに、教室の大きさが人数に合わず、小さすぎます。学校には、トイレはかならずあるのですが、100人当たりにトイレがひとつというのが平均のようです。このためユニセフは、学校のトイレ設備の改善をすすめています。農村では女の子への教育（女子教育）が進んでいません。そのため、「コミュニティスクール」、つまり「村学級」を特に貧しい地域に開設しています。豊かな家庭の子どもたちは、教育の質が高くて、設備の整った私立に行くのが普通です。このような子どもたちは日本の同じ年の子どもたちと同じような暮らしかたをしています。

ユニセフでは女子教育の推進にも力を注いでいます
UNICEF/Baquer Namazi

Q エジプトに、貧富の差はありますか？もしもあるとしたら、どれぐらいの差があるのですか？特に、スラムや地方の人びとの暮らしについて知りたいです。
（品川　夏乃　16歳）

こんな質問や意見があったよ！

ネットワーカーから出た質問や意見と、大澤さんのお返事を、みなさんにお伝えします！

A 貧富の格差はもちろん、地域格差がかなりあります。南北格差といってもいいですね。ナイル川下流の都市部に豊かな人びとが集中し、南部の3県においては貧困をあらわす指標、乳幼児の死亡率や子どもの栄養不良の割合が高くなっています。これは基本的な保健や福祉の制度が整っていないためです。人口の55パーセントが1日2ドル以下の収入で暮らしています。

カイロ郊外に有名な「ごみ収集者」のスラムがあります。彼らにとってごみは「財産」なので、家の中にあります。最近NGOなどの支援で、ようやくごみと台所、洗面所がわけられるようになってきました。トタン屋根の粗末な住居がほとんどですが、最近ではレンガの建物もみられるようになりました。

Q エジプトでの差別問題に関して知りたいです。宗教の関係上、実際に女性の立場はどうなのでしょうか？　（中佐　友衣　16歳）

A 多くの人びとは、イスラム教は女性を差別していると勘違いしているかもしれません。無理もありません。戒律を通じて、ヴェールの着用を強制したり、運転の禁止など行動の制約をしたりして、女性を差別している国が実際あるのですから。しかし、イスラムは本来、他の宗教よりも男女平等を重んじている宗教です。問題は、どうイスラムを解釈するかです。

エジプトでは、特に南の地域に住む貧困層の人びとが、女性は教育を受ける必要はないと思っています。また、「適齢期」を迎えた未婚の女性たちは一家の「名誉」を汚さぬよう、親よりも兄弟によって行動の制約を受けています。

私は、女性の性器切除の廃止に関するプロジェクトの担当をしています。女性性器切除は、現在、アフリカの28カ国でおこなわれている女の子の人権に反する暴力行為です。思春期を迎える前の女の子がこの「処置」にあっていて、女の子の同意も得ず、ときには力ずくで、女性の性器の一部を切除します。健康を害するだけではなく、精神的にも傷として一生残ってしまいます。

この問題の原因には社会における女性の地位の低さにあります。女性には「こうあるべきだ」という考えがあてはめられるのに、男性は「何をやってもオッケー」です。この問題はエジプトが抱える「女性差別」を象徴的にあらわしているようです。ユニセフは、この問題について意識をあらためてもらえるように、啓蒙活動をしたり、情報提供をしたりしていますが、人びとの意識を変えるのには時間がかかります。

家庭の水道設備が十分ではないため、遠くまで水をくみに行く子ども
UNICEF/Baquer Namazi

Q 大澤さんは、どのようにしてユニセフの職員になったのですか？また、どうしてなろうと思ったのですか？　（品川　夏乃　16歳）

A 私は特に女性の人権の保護や、女性への暴力問題に関心があり、子どもと女性のために積極的に取り組んでいるユニセフに関心がありました。今はアソシエートエキスパート制度（日本政府が日本人の国連職員を増やすために実施している制度）を利用して、ユニセフで働いています。営利の追求ではなく社会的に立場の弱い人のために働きたいと思ったことと、大学時代に訪れた東南アジアの国ぐにで、貧富の格差を目の当たりにし、何とかしたいと思い開発学を勉強して今にいたります。

Q エジプトでの仕事のなかで、今、最も重要なことはどんなことでしょうか？　（けいこ　15歳）

A エジプトでは、よくアフリカにありがちと思われるような問題、つまり内戦や飢饉などはありません。ただ、エイズの増加率が200パーセント近く、HIV/エイズが広まる危険要素（麻薬の横行、女性のHIV/エイズ感染率の増加）が見られるため予断を許しません。また、エジプトにはまだポリオがあり、ポリオ撲滅のための重点国になっています。識字率も平均50パーセント台とかなり低いのが問題です。男女平等の意識が低く、女子教育への軽視や女性性器切除など、女の子の人権をそこなうような問題も多くみられます。

Q 子どもと実際に接する活動はありますか？また、エジプトにも“ユニセフ子どもネット”のようなものはありますか？　（けいこ　15歳）

A 子どもと接する機会はあります。そこが、ユニセフの良いところだと思います。ユニセフは確かに、援助を直接実施する機関ではありませんが(※)、すべての過程に関わって、プロジェクトの「監視」をおこなっています。ですから、支援事業の活動を見に行くことが多く、たくさんの子どもたちにも出会いました。

残念ながら子どもネットはありません。ただ、「子どもの権利条約」をフォローする子どもたちが参加する「子どもの権利委員会」がつくられていたりします。

※実際にプロジェクトをおこなっているのは、現地の政府や住民、NGOなどで、ユニセフは主に計画を立てたりアドバイスをしたりすることが多いのです。

Q ストリートチルドレンに対して、現地では具体的にどのような活動を実施しているのでしょうか？また、そのような子どもたちに対しての施設などについても知りたいです。　（中佐　友衣　16歳）

A ストリートチルドレンは主に都市部にみられ、年齢はだいたい2歳から18歳、男の子も女の子もいます。多くの子どもたちは栄養不良で、皮膚病があり、道ばたで暮らしています。いやおうなく物乞いをしたり、買春の犠牲になったりするため、自分の心や体を大切にできず、精神的な病気を抱えている子もいます。ストリートチルドレンは、社会的に弱い立場に置かれており、暴力をふるわれる対象にもなっています。また、タバコや麻薬を飲用しているストリートチルドレンがほとんどです。

最近になって社会問題としての認識が高まり、今年初めにユニセフは、政府機関とともにストリートチルドレンに対応するための国家戦略を打ち立てました。今、ユニセフは政策レベルでストリートチルドレンへの対応をおこなっています。主なものが行動計画の策定です。エジプトでは、法を犯した子どもは、少年刑務所もないため、おとなと同じ劣悪な環境の刑務所に入れられ、そこで暴力にあうこともあります。そのため、今、少年法の改定にも努めています。

都市部ではストリートチルドレンに関する問題が深刻です
UNICEF/Baquer Namazi

みんなの感想

ぼくはエジプトといったらピラミッド！といった知識しかなかったけど、大澤さんのくわしい解説で、ふだんは知ることのできなかったエジプトの人びとの現状をありのままに知ることができました。参加してくれたみんなはどう思ったかな？

●大澤さんイロイロありがとうございました！！子どもたちの生活など、とても勉強になりました！
（三木　綾子　13歳）

●今までたくさんの質問に答えていただきありがとうございました。おかげさまで、エジプトについて知らなかったことを今回いろいろと知ることができました。（今回のメールを、今後も読み返して、活用できたらと思っています）エジプトで教育に関して、これからどんな発展がみられるか見守りたいです。経済の発展による社会の安定を期待したいと思います。　（けいこ　15歳）

●やっぱり、アフリカの中で最も裕福だと言われているエジプトにも、貧富の格差はあるんですね。しかも、住民の約半数が1日2ドル以下で暮らしている地域もあり、その一方で優雅な生活を送っている人もいて……あらためてびっくりしました。大澤さんのメールからエジプトのさまざまな問題を知ることができました。　（品川　夏乃　16歳）

●今まで想像していたカイロのイメージと違って、カイロがすごく治安が良いということに驚きました。大澤さん、お返事ありがとうございました。私も早くエジプトへ行ってみたいと思います。
（中佐　友衣　16歳）

●日本にいる私たちは、エジプトの人がどういう暮らしをしているのか知る機会はあまりありませんでした。今回は、実際に現地にいる大澤さんから直接届くメッセージで、本当のエジプトの姿を知ることができたと思います。エジプトにも、たくさんの問題があることがわかったけど、いろんな人がそれを解決するために努力していることもわかりました。私たちも、もっと現地の状況を知って、自分たちにできることをやりたいと思いました。大澤さん、どうもありがとうございました！
（秦　聖一郎　17歳）

メーリングリストに参加しませんか？

今、メーリングリストがアツイ!!

日本全国にちらばるユニセフ子どもネットワーカーが、電子メールを使って意見交換できる“メーリングリスト”に参加しませんか？現在、約90人のネットワーカーたちがメールで熱いトークをくりひろげています！おもうしこみは、子どもネット事務局まで。
電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

REPORT & INFORMATION 報告とお知らせ

お問い合わせ・もうしこみは
ユニセフ子どもネット事務局
(日本ユニセフ協会 広報室内)
住　所：〒108-8607
東京都港区高輪4-6-12
でんわ：03-5789-2016
ファックス：03-5789-2036
電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

お知らせ Information

参加者募集 メーリングリスト企画 レポーター募集！

今回6～7ページで特集した、ユニセフ・エジプト事務所の大澤さんへのインタビューを読んでいただけましたか？事務局では引きつづきメーリングリストを使った企画を計画中です。たとえば、世界各地で活躍するユニセフ日本人スタッフに、いろいろ質問したり、意見を聞いてもらうインタビューやディスカッションなど、みんなが参加できる楽しい企画を考えています。企画が具体的に決まりしだい、子どもネットニュースやメーリングリストで発表していきますので、お楽しみに！

そこで、このメーリングリストでのやりとりを記事にまとめて、子どもネットニュースでみんなに発表してみませんか？今回のメーリングリストでのインタビューは、九州に住んでいるネットワーカーの秦くんがレポーターになって報告してくれました。「わたしもやってみたい！」という人、大募集です！メーリングリストに登録している人なら誰でももうしこみできます。また、「こういう企画のレポートをしたい！こんな人にインタビューしたい！」というアイディアも募集しています。

©日本ユニセフ協会/NOZAWA

企画委員のもうしこみ方法

次のことを書いて、メールで事務局まで送ってください。

1.名前とネットワーカー番号

2.レポーターになってやってみたいこと

メールアドレス：jcuinfo@unicef.or.jp

子どもネットニュースは、みなさんで作っていく新聞です。
たくさんの応募をお待ちしています！

LETTERS ユニセフ子どもネットニュース NO.5を読んで ネットワーカーからの感想

前号では、イラク戦争についてネットワーカーからの意見をご紹介したり、「国連子ども特別総会」などについてとりあげました。たくさんのメールやお手紙をありがとうございました。これからもみなさんからのご意見やご感想をたくさんご紹介していきます。お便りをお待ちしています！

●日本は先進国であり、戦争をしていないから国民は心の余裕があるのに、国内行動計画を作る取り組みさえまだ始まっていないことにショックを受けた。私はこのネットニュースを読むまで国内行動計画の存在さえ知らなかった。子どもに関する計画を当の本人である子どもたちが知らないのは問題であるので、子どもたちに国内行動計画とはどういうものなのか知ってもらい、どういうものを作っていけばいいか一緒に考えたい。

（横田　恵里　17歳）

●「国連子ども特別総会」のように、子どもが意見を言える場が整ってきたのは良いことだと思う。しかし、それが具体的にどんな影響を与えるのか。少なくとも私の身の周りでは変化はない。このままでは何も変わらない！と危機感に似たようなものを感じました。

（鈴木　智瑛　15歳）

●アフガニスタンのザハラの話が、印象にのこりました。学校へ行きたいために、男の子にまでなるザハラに感心しました。今は女学校もあるのでいいと思いますが、女の子もちゃんと学校にいけるようになればいいと思います。

（遠山　優香　14歳）

●イラク戦争が終わり、しばらくたったが、近ごろニュースで報道しなくなった。しかし、イラクではまだ私と同世代の子どもたちが苦労して生きている。そのことによって日本はいかに恵まれているか、募金の大切さを知った。私たちが、これから困っている世界の子どもたちになにをしてあげられるか、あらためて考えてみるべき。

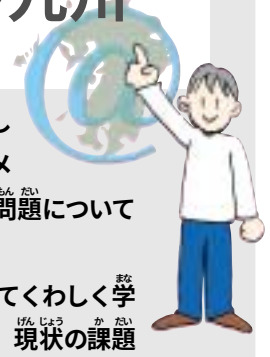
（中村　翔也　13歳）

●北朝鮮の子どもたちについての記事をとりあげてほしいです。北朝鮮の現状をみても、軍隊のことや金正日についてのことしか報道していないので、子どもたちのことも知りたいと思います。そしてできるなら、募金などもしたいです。

（三木　綾子　13歳）

報告 Report

学習会 ユニセフ子どもネット@九州 第5回学習会報告



8月12日、今回で5回目の学習会を福岡でおこないました。自己紹介の後、ストリートチルドレンに関するドキュメンタリーのビデオを見て、ストリートチルドレンを取りまく問題について考えました。

午後はストリートチルドレンについてとイラク戦争についてくわしく学び、ディスカッションをしました。ストリートチルドレンは、現状の課題と、解決法について意見交換をし、イラク問題については、その背景と歴史、イラク戦争前後のユニセフの活動について知ることができました。また、今後の活動についてもみんなで話し合いました。

・初めて学習会に参加したのですが、みんな社会問題についてよく知っていて、とても驚きました。
（大原　倫子）

・話し合いに参加できて楽しかったし、今まで知らなかったことも学べました。
（梨田　麻衣子）

・初の山口県からの参加者もあり、なんだか新鮮な感じがしました。たくさん新しい企画のアイディアが出ましたが、実現できるようにがんばりましょう！
（三浦　麻理英）

・準備は大変だったけど、当日は充実した話し合いができたと思います。ユニセフ子どもネットがますます発展できるように、これからもみんなでがんばっていけたらいいなと思いました。
（秦　聖一郎）

アドバイザーとして来てくださった、日本ユニセフ協会九州本部の金子さん（中央）をかこんで

熱心に参加してくれたメンバー

お知らせ ユニセフ子どもネット@九州では、ホームページやメールマガジンを作って学習会の告知やくわしい報告などをしています。掲示板で意見交換もしています。九州に住んでいないネットワーカーも大歓迎です。ぜひ遊びにきてください！　ホームページアドレス　http://unicef-cnk.hmc6.net/

（報告：新田　真之介　17歳）

フォーラム ユニセフ子どもネット@北海道 学習フォーラム“Talking Our Life”開催報告

私たちは8月9日に、高校生を対象としたフォーラムを札幌でおこないました。「子どもの権利条約」「イラク戦争」「私たちの未来」をテーマに、私たち高校生は「自分の人生に、社会に、何を求めるのか。そしてそのためにどのように生き、行動し、何ができるのか」といった、普段は考える機会があまりないのかもしれないけれど、考えなければならない問題について、みんなで真剣に語り合いました。

当日は、まず「子どもの権利条約」のなかで、日本が守られていないものがあるかどうかについて話し合いました。みんながだしてくれた意見の中には、「大きな病気にかかっても、国がすべての治療費を出してくれるわけではないので、適切な医療が受けられないことがあるのではないか」「情報化が進む日本のような先進国だからこそプライバシーが守られていないのではないか」「朝鮮学校に通う在日朝鮮人の人たちが日本の大学に行くためには、大検を受けなければならないというのは差別なのではないか」など、たくさんの問題があげられました。

イラク戦争についても、「イラクから連想すること」をもとにして話し合いました。戦争、アメリカ、貧国、難民、テロなどさまざまな事柄が浮かび上がりましたが、なかなかもう一歩踏み込むことができず、戦争について考えることのむずかしさを感じました。同年代の人たちが集まって、いろいろな問題について話し合うことができ、とてもよかったと思います。（報告：門脇　真弓　17歳）